

県北 どらくろあ

第87号 2023年6月1日（毎月1日発行）

芸備線ストロール⑱ 布原駅

「SL三重連で大人気も 今は静謐な秘境駅」

取材日は5月15日月曜日、朝8時過ぎに車で家を出た。芸備線沿線の田園地帯の中を走る。水を張った田が多いが、田起こしがまだで蓮華が咲いている田も残っている。田植えがすんで苗が並んでいる水田は少数派だ。

9時30分ぐらいに備中神代駅に到着。42分発の新見行きに乗る予定だった……。しかし、芸備線の3番ホームで待っていたら、到着したのは伯備線の1番ホーム。あ

わてて跨線橋の階段を駆けて移動したが、車体も黄色で伯備線の列車だ。

あらためて駅の時刻表を確認した。9時42分発の新見行きは伯備線の時刻表だった。今までは、ターミナル駅の備

後落合駅を除いては、時刻表は芸備線だけだった。それで、発車時刻を調べたときに、同じ新見行きなので勘違いしてしまった。

芸備線の9時台の列車は20分発の新見行きで、すでに時間は過ぎていく。伯備線の列車に乗るべきだったかとも思ったが、伯備線の次の停車駅は新見駅、布原駅は形式上伯備線の路線に組み込まれているが、布原駅には停車しない。停まるのは芸備線だけで、運転系統上では芸備線の駅として扱われているのである。

芸備線の次の新見行きは午後3時52分、本数の少ないローカル線の恐いところだ。反対方面を見ると、13時12分発の備後落合行きがある。これから歩いて布原駅まで行こうと決めた。そして、布原駅からの帰りに芸備線の列車に乗る――。

2席しかない小さな待合室で、コロッケパンとベーコンエッグパンで

遅い朝食、腹ごしらえをしてから出発。駅前の道を右に行くのと、すぐに踏切の前に出る。単線なので、芸備線も伯備線も同じ線路上を走ることになる。踏切の隣がトンネルで、内部をじっくり見る

ことができる。

西川（にしがわ）の峡谷沿いの道を進むと、トンネルの出口の踏切に出る。それからゆるやかな上り坂で、ガードレールの右手の線路や川の流れが次第に眼下に、離れて見えてくる。車が一台、通れるぐらいの道幅だが、路面は舗装されていて、あとで調べると県道8号新見日南線で、岡山と鳥取を行き来する山越えの主要ルートの一つだったと思われる。

新緑の山中の道は快適で、まるで遊歩道を散策しているようだった。路傍にイタドリ

の太い新芽が伸びているのを見つけて、折り取って皮を剥いて食べた。この時期のイタドリはそんなに酸っぱくはない。子どもの頃によく喉を潤したものだ。

トンネルになっっている箇所がある。隧道（ずいどう）と古い呼び名を使った方がふさわしいだろう。岩を人力で掘ったのか、表面がデコボコしている。モルタルで表装しているのだが、まるで鍾乳洞の中を歩いているような気がした。

40分も歩いただろうか。手の遮断機があつて、上げられたポールには「大雨のため全面通行止め」の看板が下げ



である。その先の道路が分岐している。「布原駅」の標識もなく迷ったが、谷の方に降りる道を選んだ。それが正解で、大きく開けた場所に出た。西川の欄干もないコンクリートの橋を渡ると線路があつて、少し戻った所に布原駅はあつた。

岡島の秘境駅が内名駅であるならば、岡山の秘境駅は布原駅である。内名駅にはまだホームに待合室があつたが、布原駅には風雨をしのぐ建物はなく、駅名を記した看板が立っているだけである。

布原駅は、昭和11年（1936年）に国鉄伯備線新見―備中神代間に、布原信号場として設置された。信号場とは、停車場として分岐器（ポイント）や信号設備が設けられている



SL三重連の写真を使った急行券



布原駅近くの「第23西川橋梁」



西川沿道のノブキの群生

場所、列車の行き違いや待ち合わせのための施設。昭和62年（1987年）の国鉄分割民営化と同時に、正式な駅へと格上げされた。有人の信号場時代には駅舎に相当する建物があつたようだが、今は撤去されて存在しない。

ホームに上がる石段の鉄柵に、鉄製の工具箱が接着されている。留め金を外して蓋を開けると、「秘境駅ノート」と表示されたノートが3冊。

2冊は雨に濡れたのか、判読が難しいほど傷んでいる。無事なノートを読むと、以前のプラスチック製の容器が劣化で割れたので、鉄製のものに取り換えたと書かれている。乗客の人だろうか？
遠くは山形からはるばる訪ねて来

た人がいる。大阪から来た人は、これから歩いて新見駅まで帰ると書いている。急行列車の「やくも」を撮影にきた撮り鉄もいる。周りを山に囲まれて、そばを流れる西川（一頁写真下）のせせらぎが聞こえてくる。

ホームに大の字に寝転んだ。陽光を吸収したコンクリートがじんわりと暖かい。五月晴れの日射しを全身に浴びて、冬の澱のような鬱屈が晴れてゆくような気がした。

今は秘境駅と呼ばれる布原駅だが、かつては多くの鉄道ファンが押し寄せたことがある。蒸気機関車3両で貨物列車を牽引するSL（蒸気）三重連の撮影が目的だった。動力の弱い蒸気機関車は、車両を増やすことでその非力をカバー、急坂の山間地は

3両をつなげたのである。D51形蒸気機関車の三重連が走る写真が、急行券に使われていた（写真上）。SLが走らなくなった今でも、布原駅の近くの「第23西川橋梁」（写真中）は、撮影スポットとして根強い人気があるという。

西川の沿道を川下に向かって歩いた。下流に河本ダムがあつて、流れが次第にゆるやかになる。舗装道路は次第に荒れて砂利道になり、草の丈が長くなる。車の轍（わだち）の部分だけ土が露出しているのだが、真ん中部分がまるで畑のように草が生い茂っている。ノブキ（野生の蔦、写真下）の群生で、山菜として販売もされている。

このままでは帰りの列車の時刻に間に合わない。途中で引き返した。駅の時刻表は、当然ながら芸備線だけだ。13時7分発の東城行きに乗った。本来は備後落合行きだが、落石による列車の脱線事故の影響で、東城―備後落合間は未だ不通。5月下旬の復旧が当初の目標だったが、今後の落石対策が必要との判断で、7月下旬に変更された。

乗車客はわたし一人だったが、6人の先客がいた。外国人観光客が二人。ともにスキンヘッド、よく似ているので親子なのだろう。老年のお父さんの方がスマホで、列車の前方の車窓から動画を撮っている。コロナ禍の終焉を実感した。



どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「ひと」

小野寺史宣 著 祥伝社

高校生 2 年のときに父親が事故死。鳥取で働く母親のおかげで東京の大学に通っていた柏木聖輔だったが、母親が急死、天涯孤独の身の上になる。大学も中退、切り詰めた生活をす

る中で出会ったのが、近くの商店街の総菜屋だった。揚げたてのメンチカツの味に感激、バイト募集の貼り紙に応募する……。主人公が善良な好青年で、人情豊かな人々を引き寄せる。一昔前は、孤独癖のある不良キャラがもてはやされていたが、今はこうしたアクのないタイプが好まれる。それだけ世相が荒れているということか。ストイックな大谷翔平の人間性が称賛されるのも頷ける。



「解錠師」

スティーヴ・ハミルトン 著 早川書房

8歳のときの悲惨な事故で家族と言葉を失ったマイク。孤独な彼を救ったのは、絵を描くことと、古い錠前をパズルのように開錠することだった。やがてマイクの特技は、犯罪組織に知られることとなり、恋人を守るために、神技的な腕前を待つ老金庫破りに強制的に弟子入りさせられる。かくして、プロの錠前師としての過酷な日々が始まった……。



まるで文学作品のように、マイクの深層心理を丹念に描くことで物語は進行する。マイクが参加するミッションは刺激的だが、あくまでもマイクの視点、感性で描かれている。最後まで一人称なのは感心、これがなかなか難しい。

「さよならタマちゃん」

武田一義 著 講談社

作者は 35 歳、売れっ子マンガ家のアシスタントで、マンガ家を目指している。酒もたばこもやらない彼に、精巣腫瘍という癌が見つかる。肺に転移があって、病巣切除のあとで長い入院生活が始まった。まるで私小説のように、病院内での生活が詳細に描写されている。

アシスタントの中では年長でも、癌病院の中ではダントツの若手。抗癌剤で苦しむ場面も、ほのぼのとした絵柄が痛みを和らげてくれる。人生経験が豊富で個性豊かな老患者たちの生きざま、いや死にざまが暖かく描かれている。読んでいて笑顔になれるのだ。作者はこの作品が初連載、マンガ家デビューを果たした。



「ぐんぐん伸びよう会」

(教室：庄原市川西町 241 連絡先：080-3631-9125 やないたえこ)

当教室での教育の目的は、自分で学んでいける人間に！！

当教室では、個人別学習法で学年の枠がありません。一人ひとりの学力、気力、作業力の「ちょうど」を見ながら学習してもらいます。一斉の授業形態とは異なり、一人ずつの生徒の持っている可能性にチャレンジしていくことが、指導者としての私の役割です。

無料体験学習受付中！！ お気軽に問い合わせてくださいね。

対象者：0歳～小学 6 年生



文学探訪

庄原と「百三の青春」⑤

倉田家の家風——華やぎの光と影

音谷健郎

今回は、常に吾が道を行く振る舞いの倉田百三を温くはぐくんだ生家、呉服商・倉田家の華やかな家風について触れて見ます。

そのためにも、明治の黎明期から、次々と新しい事業を試みた庄原町の雰囲気から探ってみます。

この庄原は、交通の要所として農産物が行き交い、明治になると養蚕業や牛の取引で活気がありました。

その一方で「古来から非常に植民地的性格をもっている」として郷土史の手引き『永江庄からの庄原町へ』に次のような記載が見られます。

「明治の初め洋風とうとうとして国内に浸潤し鹿鳴館で貴顕紳士が外人とダンスに夜をあかした頃、庄原に於いても永江俱樂部という社交場が出来て文明開花の空気にふれることに努め、又風蘿庵といって店滝に俳人

の集合所が生まれ、それらの者が薫風を慕うて芭蕉碑を（現在宝蔵寺内）そのうちに建てていたこと等は、庄原人が由来文化的風格を持つていたことを示すものである」とあります。どう「解説」したらいいのか分からないままに、ここに紹介します。

この地名「店滝」の地形は、ほぼ昔のままに残っているのが、私には不思議な気がします。だが、この文化的な社交場の記憶は、百三の回顧には探しても見つかりませんでした。百三の父・倉田吾作から百三に受け継がれている、吟詠の風流心はこのあたりに痕跡があるのではないかと調べたのですが、関連は不明です。さて、父・吾作は、呉服商の傍ら、

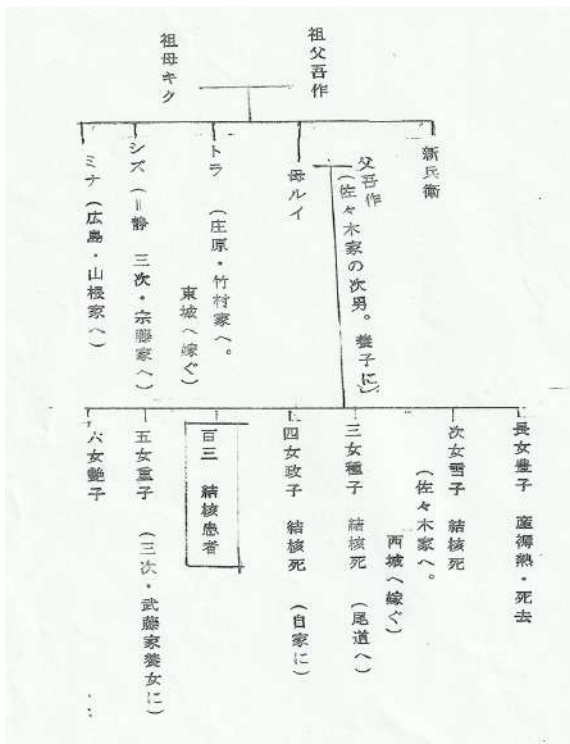
製糸工場の設立にも手を出し、「五人男」に数えられたりしました。一方で吾作は、義太夫を語り、三味線にも手を染めていたりもします。

百三は、この父のことを「正直で、感情が豊かで、諸芸がよく出来て、宗教心が深いこと、しかし実務上の処世術にうとく、余程がっちり努力しなくては世間の荒波を乗り切り難いような性格」（晩年の作『光り合ういのち』と記しています。これは、「私たち同胞が親から享け継いだ遺産である」とも百三は記しています。

ここで倉田家の7人の姉弟を見回します。長女は豊子、華やいだ女性と評判でしたが百三が小学生の時、26歳で心臓麻痺で死去。次女雪子は、西城の親戚の教師に嫁ぎます。3女種子は尾道の叔母、叔父夫婦の元に養女に。4女政子も美貌の女性で、自家に残っていました。

5人目が百三。5女の重子は百三より2つ年下。叔母に当たる三次の宗籐家に養女に出されています。宗籐家は叔母の嫁ぎ先で、百三が中学時代に寄宿した先です。

百三は、呉服商倉田家の跡取り息子として期待されており、百三も跡継ぎを覚悟して、三次の素封家で年上の小出豊子に思いを寄せ、手紙を



倉田家の系図



店滝から宝蔵時寺境内に移されている「芭蕉の句碑」。「旅人と我名よばれん初しぐれ」と読めます



生家跡の碑。後ろに倉田家を受け継いだ「西上デパート」の看板



艶子による兄・百三を偲ぶ碑文。妹ならではの率直な文面

交わっています。父・吾作はそれを
知ると喜んで結婚を申し込みますが、
すでに嫁ぎ先が決まっていると断ら
れたのでした。父・吾作は不憫に思い、
百三の進学を承諾します。その時も
はじめは早稲田大学を推しますが、
百三の「哲学」をしたかったので東大へ
との意欲に負けて許します。

百三は、一高に入ってから、し
きりと三次の宗藤や妹重子に手紙を
書いて近況を報告しています。重子
は、勉強に励み、学校では、よく「代表」
の役を果しています。百三は「私の
伶俐な少女」と自慢しています。

重子の2歳下が艶子です。百三は、
艶子の東京女子大受験の指導に始ま
り、入学後は艶子を伴って東京を散
策しています。その艶子の学友の逸

見久子に一目惚れするいきさつは前
の5月号(86号)で書きました。

ここで立ち止まって見回してみ
ると、商売が繁盛している倉田家では、
長女豊子と4女政子、末っ子艶子を
残し、娘たち6人のうち3人を、身
内の嫁ぎ先に養女に出しています。
1つには、それぞれの家庭に子ども
がなかったこともあり。同時に、
明治という時代は、このように一族
の結束と広がりを目指したのだろう
かと気づかされました。

これら家族の親密さでは、百三は
三次中学3年の時に、学校を休学し
て3女種子の尾道の家に1年間逗留
しています。田舎者コンプレックス
を克服するためと云います。学校に
は、脚気の療養と仮病を使っていま

す。学校の休みには、次女雪子の西
城にも押しかけています。

家族の親密さを挙げるならまだあ
ります。父・吾作と百三、種子、政
子の4人で大阪博覧会をだしに、大
阪、奈良、伊勢の旅行もしています。
家族の親密さと同時に、豊かな生活
を垣間見ることが出来ます。

上京してからは、父・吾作は百三
の退学・恋愛のことで東京に駆けつ
けています。百三は逸見久子への思
いが断ち切れず、結核の身で北海道
に行こうとします。吾作は、百三の
要望に応えて付き添いますが、さす
がに途中で引き返します。

一高を中退した後は、百三は結核
の転地療養や療養中に押しかけてき
た看護婦「お絹」さんとの交際、京

都の修養団体・一灯園での修業と、
生き方を求めて悩んでいます。

でも、この倉田家の百三をめぐる
いきさつは、大正5(1916)年、「キ
トクカエレ」の電報で暗転します。
4女政子が産後の容体悪化から亡く
なったのです。ほぼ同時に祖母キク
の老衰死、尾道の種子の肺結核死と
重なりました。

帰郷した百三は、家業の行き詰ま
りや家産の負債を知り愕然とします。
「私には、家を支える方策や力が無い」
と非力を嘆きます。

だが、百三はへこたれるどころか、
この後、受難のなかで創作の道に突
き進みます。逆境でますます不屈の
精神を燃やす姿が、浮き上がってき
ます。やはり非凡な人物です。

翌大正6年には、父・吾作から無
理矢理に500円を出して貰って、
知人の岩波茂雄が営む岩波書店に頼
み込み自費出版した『出家とその弟
子』が、思いがけずベストセラーと
なります。運命が一転します。

次回は「旧制三次中学の友・他―
情熱のぶつけ合い」を取り上げま
す。

「植物画とは何か
—日本の植物図譜を中心に—」(18)

井波一雄(1917～?)は名古屋市に生れ、くわしい経歴は不明、「(国立科学博物館は)毎年、全国の同好者から募集した腊葉(さくよう)展を行ったが井波氏は常連の一人で2回も功労者として表彰された。初回は昭和17年太平洋戦がはじまった2年目」と1940(昭和15)年に出版された「牧野日本植物図鑑」を刻明に複写したという「日本スミレ図譜」序文から考えると、井波は20歳ごろまでに植物に興味を持ち、25歳のころは腊葉展で表彰されるほど、熱心な植物愛好者に成長していたといえる。

そして、初めて植物図を発表したのは「昭和30年(第19回展)にはみごとな写生図9点が出品された」とあることから1955(昭和30)年といえる。そして、1965(昭和40)年に大井次三郎の「日本植物誌」の英語版に「全ページ大のミヤマトベラ、カキノハグサ、ハイルリソウ—これは井波氏が発見された新種—など7種の写生図がおさめられている」というから、40歳までに植物図家として自立していたといえる。従って、「広島県植物図選」は64歳から73歳、晩年の円熟した時期の作品といえる。ここにも牧野の技法が継承されている。

1980年代に入ると、専門的な図鑑から一般向けの図鑑まで、精巧なカラー写真で撮られた植物が印刷された図鑑となり、「牧野日本植物図鑑」のような線画で描かれた図鑑が消えていく。こうした流れの中で、浅野貞夫と桑原義晴が半世紀にわたって描きためた図と記述を基に撮影されたカラー写真を加えて印刷され、出版されたものが「日本山野草・樹木生態図鑑」である。この図鑑は例えばイチリンソウの場合、イチリンソウのカラー写真を左に、その右に浅野が描いた植物図(図1)が並べられている。浅野貞夫と桑原義晴の図以外、村尾宵二、天野斗史子、斎鹿潤子が描き、植物生態学者沼田眞の校閲を得た図が加えられている。浅野貞夫が描いたイチリンソウの図は、中央へイチリンソウの全形図を置き、まわりがく片、雌しべ、雄しべ、果実の集まり、果実、種子の部分図、幼苗の全体図をバランスよく配置している。この図は牧野や井波同様、細部まで綿密に観察した上、全形図と部分図を描き、それらをバランスよく配置していて、ここからは牧野の技法が継承されていることを窺い知るだけでなく、植物生態研究者としての気迫が伝わってくる想いがする。

浅野貞夫(1906～?)は山形県生まれ、1925(大正15)年に山形師範学校(現在の山形大学)卒業後、しばらく山形県内の小学校に勤務していたが、難関の文部省中等教員検定試験の植物科・動物科に合格後、千葉県立長狭中学校(旧制)教諭となり、1930(昭和5)年～1970(昭和45)年、千葉県内の高等学校で勤務し、1969(昭和44)年に千葉県文化功労賞、1987(昭和62)年は地方文化功労賞を受賞している。



桑原義晴(1908～?)は北海道生れ、1936(昭和14)年、札幌師範学校教員養成所修了後、北海道内の小学校に勤務、1949(昭和24)年、文部省中等教員検定試験(生物)合格後は高等学校へ転じ、1969(昭和44)年まで勤務し、1952(昭和27)年に第1回読売教育賞、1969(昭和44)年は日本生物教育会賞を受賞している。「日本スミレ図譜」が出版された後に線画で描

粹、転載しています。

著者紹介…一九三一年、比婆郡(現・庄原市)比和町に生まれる。農学博士(九州大学)。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びとと」(シンセイアート出版)から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

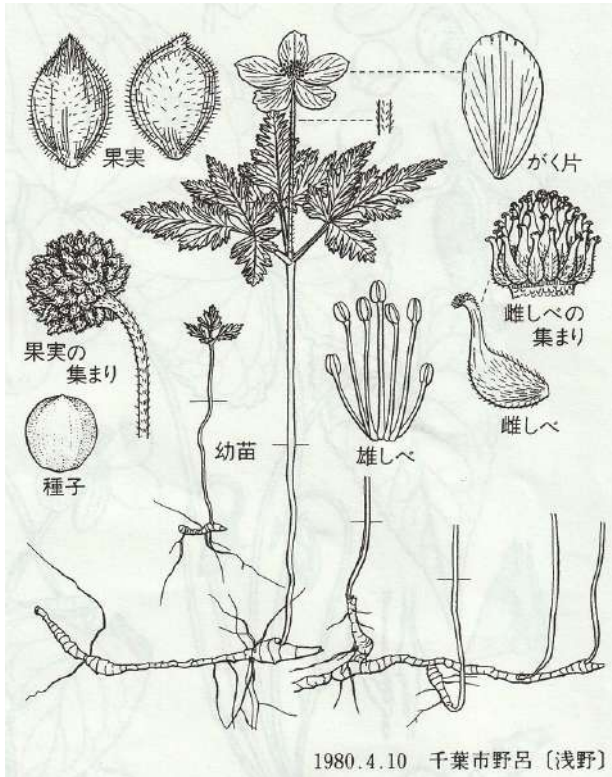


図1 イチリンソウ
 (「日本山野草・樹木生態図鑑」による)

かれた植物図で作成・出版されたものに、鈴木貞雄の「日本タケ科植物総目録」と日本シダの会・企画編集の倉田悟・中池敏之の「日本のシダ植物図鑑」(全8巻)、「広島県植物図選」(全5巻)がある。「広島県植物図選」については前述のとおりなので、ここでは「日本タケ科植物総目録」と「日本のシダ植物図鑑」について記述する。

「日本タケ科総目録」は、口絵にカラーで大沢金一が描いたモウソウチクなどの植物図があり、本文は、左に標本の全形写真(モノクローム)、右に大沢金一が描いた絵画の植物図(一部は石井美枝子が描いている)が載せられ、見開きとなっている。大沢金一と石井美枝子については全く知ることができないが、鈴木の手指示を忠実に守って、標本に基いて精密に描写し、花や実などの部分を余白に配置して仕上げています。恐らく全形図と部分図は別々に描き、それらを組合せたことであろう。描かれたタケ・ササ類は日本産全種(変種・品種もふくむ)に及び、大沢と石井が描いた図は、難しいタケ・ササ類の分類上の要点が正確に描かれ、出色のでき映えである。

「つれづれ歌談」③⑥

松岡初枝

海に山に人々が繰り出し、その幸が届くころ、心うきうき、少し羽目はずす人も多くなるのも無理からぬころです。

・大崎の神の小浜は狭(せば)けども百船人(ももふなびと)も過ぐといはなかに

石上(いそがみの)乙麻呂大崎の小浜は狭いけれど、沢山の船人達がす通りせず集まってくることよ…。何気ない歌に思えませんが、この歌は乙麻呂が土佐に配流される時詠んだものです。乙麻呂は宮廷屈指のインテリ美男子で名家出の武人、女官達も放つときません。このイケメン、事もあろうに藤原宇合(うまかい)の未亡人、久米若売(わかめ)と恋に落ちます。それが露見したからさあ



大変。若売は下総、乙麻呂は土佐へ流されてしまったのです。彼は後に許されて出世しますが、若売はどうなったのやら…。

・今は吾は侘びそしにける気(いき)の緒に思ひし君をゆるさく思へば 紀女郎(きのいらつめ)

今私は辛い思いに沈んでいます。わが命と申うあなた。遠ざかるにまかせると申う辛さ…。紀女郎は安貴王の妻で、プライドある女です。夫は八上采女と密通して罪人となってしまったのです。采女といえは天皇に仕える特別な女官で天皇の持ちもの。正に禁忌の恋です。いつかは許されるであろう夫だが、女郎は夫を待つことなく別れの決心をした歌です。

・相思(あいも)はぬ人を思ふは大寺の餓鬼の後(しりへ)に額づくがごと 笠女郎

思ってもくれない人を思うなんて、大寺の役立たずの餓鬼を後ろから拌むようなものよ！ 大伴家持に送りつけた愛想づかしの歌、若き日の家持はかなりのプレイボーイ、女郎の捨て台詞の歌は強烈です。坂上大嬢(おおおとめ)と結婚した家持は妻一筋だったとか。やれやれ大変です。

白い封筒の中から出てきたのは一冊の本だった。「ライオンのおやつ」というタイトルで、作者は小川糸。今朝、店を開けるときに郵便受けを確認したら、中に入っていた。宛名はなく、切手も貼っていないので、郵便物ではない。

何か手紙のようなものが入っているかと思っただが、本だけだった。きれいな本だが、カバーにかすかに使用感がある。寄贈だろうか？ ときどき、店の前に古本の入った段ボール箱が置かれていたりするのだが、「使ってください」とでも書置きがあれば、ありがたく頂戴することにしている。困るのは何も伝言のない古本で、買取希望の場合もあるので、商品として店頭に出すことができない。

一冊だけというのも奇妙だった。何か意図があるのだろうか。本を手にとって、表紙をめくった。扉にタイトル名と、枝になっているレモンの絵が描いてある。ページをめくった。

(うん？)

一枚の写真が現れた。セピア色の白黒写真だった。昭和を思わせる町中で、浴衣姿の女性が映っている。にこやかな笑顔で左手を差し上げて

いるのは、「ようこそ」と歓迎しているようだ。

まずまじと女性の顔に見入った。似ていると思う人がいるが、年齢が合わない。白黒写真の時代なのだ。今はかなりの年齢になっているはず。常連の年輩の女性客に、写真の女性の面影を探してみたのだが、思い当たる人は一人もいなかった。(この謎を解けというのか?)

白黒写真

あきふゆひこ
亜木冬彦

現代御伽草子 ⑧1

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

そんな気がした。この本を郵便受けに入れた人物に、挑発されているような気がした。(やってやろうじゃないか) わたしは本を読み始めた。

(すごい小説だったな……)

フーツと大きく息を吐きだした。これだけ夢中になって一気に読んだ本は久しぶりだ。しかし、読み始め

たときは、無謀なことをすると作者の試みに半ばあきれた。

主人公の海野雫は単身、レモン島と呼ばれる瀬戸内海の小島にやって来る。その島の「ライオンの家」に入居するためだ。三十三歳にして末期癌におかされ、最後の時間を過ごすために選んだのがホスピスの「ライオンの家」だった。雫のライオンの家での日々が描か

入居者は、もう一度食べてみたい思い出のおやつをリクエストすることができ。毎週日曜日の午後三時に、そのリクエストの中から一つだけ選ばれてお茶会で提供される。その人にとっては最後に食べたい究極のおやつ——。

自分だったら何をリクエストするだろうか。子供のときは、チロルチョコレートが好きだった。練乳を固めたミルクヌガーをチョコレートで包んだもので、三山の棒チョコが十円で買えた。

祭りの夜店で売っていたイカのゲソの串焼き。醤油が焼ける香ばしいにおいに引き寄せられた。甘じょっぱい味と、コリコリした食感が好きだった。(ろくなものは食っていないな)

苦笑を浮かべた。

小説を読み終えて、この本はわたしへのプレゼントなのだと思った。わたしの本の嗜好をよく知っている人ではないか、そんな思いが強くなった。

あらためて、写真の女性を眺めた。だとしたら、この女性が送り主なのだろうか。それを明らかにするためには、この女性の正体を突き止める必要がある。一人の女性の顔が脳裏

に浮かんだ。

「静恵さん……、あなたの叔母さんは、ミステリも好きだったからね。だから、あんな謎かけをしたんだろうな」

里村美也子さんが微笑を浮かべた。笑うと白黒写真の女性の面影が色濃くなる。

「東京の老人ホームに入居している叔母が本好きなので、お土産に何冊か持って行きたいのですが……」

美也子さんから相談を受けて、無難なものを何冊か選んだ。彼女



の叔母、里村静恵さんから丁寧な礼状が届いた。本に関する感想も書かれていた。彼女がかなりの読書家で、作家にも造詣が深いことがうかがわれた。

また何冊か選んで欲しいと書かれていたので、今度は直接、郵送した。しばらくして、本の感想と一万円分の郵便為替が届いた。手紙のやり取りと本の郵送、それが三年ほど続いていた。

「違うと思います。叔母はあなたが好きだったんです」

嗚然として彼女の顔を見た。

「詳しいことは知りませんが、叔母は子供の頃に何か怖い思いをしたそう、男性が苦手でした。だから、生涯独身でした。その叔母の最初で最後の恋だったんです。あなたの手紙と送ってくれる本が、叔母にとってはライオンの家だったんです」

名前を記さずに本と写真を郵便受けに入れておいたのは、静恵さんの希望だったという。贈り主が静恵さんだと推測するのに時間はかからなかった。しかし、どうしてこんなことをしたのか不思議だった。ずっと静恵さんのことを考え続けていた……。

「叔母は、ロマンチストでしたから

ね」

そう言って合掌すると、いたずらっぽく目でわたしを見た。

「邪魔者は消えます。ごゆっくり……」

途中で振り向いた。

「かしわ餅、一緒に食べてくださいね」

わたしは苦笑を浮かべて、墓前に供えられたかしわ餅を一つ手に取った。何か欲しいものはないかと訊かれて、田舎のかしわ餅が食べたいと静恵さんは言った。柏の葉ではなく、サルトリイバラの丸い葉で合掌するようにやさしく包んだ田舎のかしわ餅。病状が進んで食べることができなくなっていたが、匂いをかいで、ああこの味だにとっこり笑ったという。

餡子の甘さが口いっぱい広がった。母親がお彼岸につくっていたおはぎの味を思い出した。甘党のわが家は、粒あんをごつてりくるんだおはぎに、さらに砂糖をかけて食べていた。

わたしは、自分のライオンのおやつを静恵さんに報告した。眼下に田園地帯が見渡せる。田植えを終えた水田が、虹色に輝いている。

(静恵さん、お帰りなさい)

まちの古本屋さん どら書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・無料本、百円本、50円本などのコーナー。無料の漫画ルームもあります。
 - ・地元の絵葉書、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
- ※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日（2月は店内整理で全休）
- TEL: 090(9913)3052
- 営業時間 9:30～18:30

※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

「旧暦」のカレンダーを見る

古川行洋

第二部 歴史事項を見る

「旧暦のカレンダーを見る」(このカレンダーは南太平洋協会発行の「こよみ」を使っています)と言うことで、第一部では「旧暦」を見るのに必要

なところを、解説してきました。この二部では、カレンダーに載っている歴史事項について、一月から順に見ていきます。

一月十三日 七三〇(天平二) 年大伴旅人宅梅花の宴

大伴氏はもともと大和朝廷の軍事

を担当していた有力氏族であった。

旅人の父安麻呂は、壬申の乱で大海人皇子について戦った。また、飛鳥から奈良時代にかけて、大伴氏は風雅を身につけ、和歌や漢文学にも優れていた。

旅人は、政界において順調に昇進を重ねた。七一二(和銅五)年、中納言に、七二〇(養老四)年、征隼人持節大將軍に任命され、七二八(神

龜五)年には、太宰師(だざいのそち)となつて筑紫に赴任した。六〇歳過ぎての赴任は過酷だ。着任まもなく

同行の妻を亡くす。

相次ぐ苦難に直面した旅人だが、風流の心を忘れず七三〇(天平二)年、梅花

の宴を自宅で山上憶良など三〇人あまりの府官諸国司等を招き催した(画像はそのときの情景を描いた大亦観風の絵、奈良県立万葉文化館



蔵)。その宴で詠んだ歌の「序」に次のように書かれている。

「初春の令月にして、気淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後(はいご)の香を薫らす。」

この部分が新元号「令和」の典拠である。

一月十六日 七五四(天平勝宝六) 年鑑真来朝

奈良時代の仏教の特徴は、王権の安泰と国家の平安を護る、鎮護国家の仏教という点にあった。七四一(天平十三)年全国に国分寺、国分尼寺を造立する詔を出した。そして、天平勝宝四(七五一)年四月九日、東大寺大仏開眼会が行われた。参列者は一万人を越えたと伝えられている。

このような時代にあつて、遣唐使大伴古麻呂に伴われて中国の唐代の高僧鑑真が来朝した。

鑑真は日本律宗(戒律の実践を主とする仏教宗派の一つ)の祖。東大寺に戒壇を設け、日本初の授戒の師となり、唐招提寺を建立した。

一月十八日 一六五七(明暦三) 年振袖火事

別名、「明暦の大火」(四代將軍家綱の時世)である。江戸三大火事(明和の大火・文化の大火)の筆頭に挙げられる大火である。この大火の火元は、本郷の本妙寺である。当時、

棺にかけられた遺品などは寺男たちが貰っていいことになっていった。それは、振袖であった。同じ振袖が掛けられた棺が再三、本妙寺に運び込まれた。因縁を感じ焼いて供養することにした。にわかに一陣の北方からの強風がおこり、空に舞い上がり落ちて火を移した。これが大火の基

になった。寺社三〇〇、蔵九〇〇〇、橋六〇、死者十万七千余また、江戸城の本丸と二ノ丸も焼いた。これを契機に、江戸の都市改造、市区改正、そして、防災への取り組みが盛んに行われた。

一月二十七日 一二一九(承久二) 年源実朝暗殺

鎌倉幕府三代將軍。頼朝の二男。母は北条政子。兄頼家にかわつて將軍となり、のち右大臣。その右大臣、拜賀式が鶴岡八幡宮本殿で行われた。その式の終つた帰りを、前將軍頼家の遺児、八幡宮別当阿闍梨公暁(べつとうあじやりくぎょう)が暗殺した。

※戒壇 師が弟子に戒を授ける儀式に用いるため、石や土で築いた壇。天平勝宝六(七五四)年、鑑真が東大寺大仏殿前に築いたのが日本で最初。

※授戒 戒律を授けること。

「日本の中古車が大活躍！ 積荷オーバーバーで大事故も」

山崎 允^{まこと}

首都ルサカから約40分のカシシ孤児院は、エイズで両親を失った子供たちが生活する施設で青年海外協力隊（JICA）が彼らに生活指導したり、時折エイズで亡くなった子供たちを埋葬する役目もしていた。朝起きて、ドアにスコップが立って

あると、前の晩に亡くなった子供のお墓を掘って欲しいとの報せだったそうだ。

わたしが日本に戻ってからのことだが、カシシ孤児院の子供たちと庄原・東城の子供たちがお絵描きの交流を図ったことがある。雪を知らないザンビアでは、冬場の八幡小学校の雪景色、スキーを楽しむ生徒たちの絵は大変好評であった。

さて、ザンビアに赴任中でのこと。事務所の同僚ミスター・トーレが「ミスター・ヤマザキはいつ車のタイヤを交換するのか？」と聞くので「当分ないね」と答え、「どうしてそんなこと聞くの？」と聞いたら、「お下がり

のタイヤが欲しいから」とのこと。関西弁で「よー言うはー」。こうなったら意地でも丸坊主になるまで乗ってやろう！と思った。

推定年齢80歳くらいのメルセデス・ベンツのトラックが、対向車線を斜めに向いたまま走って来た。「危ない！」とブレーキを踏んだが、難なくすれ違った。少し時間をおいて分



たこと。事故で車体そのものが菱形に変形したままで走っていたのだらう。車検のようなものはあるんだらうが、守らないのがこの国のことなのだ。

写真のトラックは「オーバーローディング（積み過ぎ）」でシャフトが折れたのか、3日前に通りがかった時のままの状態だった。修理に時間がかかるのを予想してか、いつも持ち合わせている煮炊き用の鍋や炭を備え、援護の同僚が返ってくるのを待っていた。夜はライオンに襲われるので運転室で、昼は泥棒に炭を持ち去られないよう外で待機していた。

登り坂を荷重オーバーで登り切れない大型トラックが坂の途中で動けなくなり、ブレーキが利かなくて後ずさりに……。そして、後ろ向きの状態で谷底に転落している残骸が5、6台あるのを見ると、生きた心地がしなかった。

「ポイントゥーン」という渡し船（両岸に固定したワイヤーロープを人力で引っ張る）に過積載のトラック、住民も満載で船ごと転覆、ワニたちの餌食になる事故が多発していた。そこに日本のODA（政府開発援助）で橋が建設されることになったので、少し救われた思いがした。

もつと怖い話、バスの運転手は前日運転免許証を取ったばかりの兄ちゃんがすることがある。バスは三菱のマイクロバス「ローザ」の中古車がお決まりとなっている。車掌が大声で行き先を告げ、満員になるまで出発させない。そのあとが大変なのだ。スピードは出さず、バスの重量が重いのにブレーキを踏むことなくカーブを曲がろうとするので事故が起き死傷者が出る。

「貧困」がもたらす負のスパイラルとも言える。日本製のトラック、バス、乗用車は日本で働くだけ働いて、第二の人生いや、「車生」なのに、過酷な仕事をさせられているので「可哀そう」と同情したものだ。

車のスピードの計測器を使った警官達への苦情もある。かつて、道路工事中であったための制限速度を落とした表示板が工事終了後も撤去されず、その区間で警官達が「ねずみ取り」をしているのは理不尽であると苦情が出ていた。国の収入が少ないので、違反として合法的に取り立てた罰金を警察署の資金にしたり、警官たちの収入にしているのは……と憶測する記事が新聞に載っていた。

どろくろ俳壇&歌壇

※参加を歓迎します。

病棟に消灯時間五月闇

近藤 昌平

おーい雲叫びたくなる夏の雲

富久光

葉桜や街角ピアノ連弾に

片岡 正人

蒲公英の絮へ夫婦の息合わせ

隆愚

何発もミサイル沈む春の海

大槇 三代子

新緑のこかげ遊ぶやランドセル

寺内 龍二

萬緑の中で大の字無人駅

赤川 冬人

天土の間を生くる老ふたり

松岡 初枝

仕事にくるる黄金週間

投稿&寄稿

候のことば

隆愚

「乃東枯」

六月二十一日から二十五日を夏至の初候といい、「乃東枯（なつかれくさかるる）」の候といひます。「夏枯草」が枯れる時期ということす。

「夏枯草」は「かこそう」ともいわれ、「韌草（うつぼくさ）」の異名です。「韌」は昔、武士が矢をいれるのに使った道具。花穂が韌に似ているのでこの名がつけました。花穂を埋めるように、紫色の花が次々と咲いていきます。やがて、枯れて茶色になると、漢方薬として用いられるのです。

花穂を煎じて飲むと利尿や消炎作用があり、また煎じ液はねんご、腫れの塗り薬にもうがい薬にもなるといひます。じつは、韌草はこの時期から咲き始め、枯れるのはもつとあとになります。ですから、漢名の夏枯草とは違うという説もあります。

「歯の話」

赤川仁洋

昼食を食べているときだった。歯が抜け落ちる感触とゴロリとした異物感……。吐き出してみると、右上の糸切り歯だ。

尾崎一雄の私小説で、奥さんの芳江が登場する。裕福な家庭で育った芳江が極貧の作家に嫁いだエピソードが描かれている。芳江は明るく暢気な性格で、尾崎一雄は愛情を込めて「芳兵衛」と呼んでいる。

その芳兵衛の金歯が抜け落ちた。芳兵衛は、にっこり笑ってその金歯を換金、好物のどら焼きを買ってきて夫婦で食べる、いや大福だったかな、記憶が定かでないが、まあこんな感じ。

わたしの抜けた歯は、保健適応の合金を被せた歯なので一文の価値もない。捨てるのもしのびないので、ティッシュにくるんで引き出しに入

れておいた。

翌朝、歯医者に行った。以前の治療時に「時間の問題です」と余命宣告されていたので覚悟はできていた。抜けた後の処置をしてもらうつもりが、取れた歯をもう一度入れてみるという。歯根が残っているので充填剤でくつつけて、横の前歯の虫歯にも充填剤を入れてサイドから補強……。いつまで持つかわからないが復活。わたしもしぶとく生きてやろうと思う。ただし、歯磨きや体調管理は大切ですよ。



どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して
いるので、ダウンロードして
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

「庄原を想う会」主催の交流会

「気軽に庄原について話し、仲間の輪を広げよう」

日時：6月24日（土）9:30～11:30

テーマ：「1ターンの元自衛官が楽しむ自然農!!」

講師：形川健一氏（自然農家、百姓見習い）

場所：生活交流館1（備後庄原駅隣接）

参加費：500円（学生200円、お茶菓子込み）

申込み&問合せ：080-3631-9125（柳井妙子）



みんなの食堂

ワンコイン（百円）でおなかいっぱい食べられます！

日時：6月24日（土）11時～14時

（毎月第4土曜日開催予定）

場所：庄原市保健福祉センター（体育館前）

西本町4丁目3-1

料金：一人百円（先着50食、予約不要）

主催：みんなの食堂実行委員会

（代表・赤堀由美子 080-5627-2148）

◆◆◆トピックス◆◆◆

本誌に連載中の山崎允さん（写真右）よりお知らせです。

WHO（世界保健機構）が新型コロナの「緊急事態宣言」を終了すると発表（5月5日）。山崎さんは5月17日、東京のザンビア大使館に赴き、昨年11月着任の一等書記官ムンダングダモ・カウエザ氏（写真左）と会談。東京都内の旅行会社への営業訪問の促進&戦略等について話し合いをしたそうです。山崎さんは、ザンビア共和国の「永久観光大使」の称号を付与されています。



編集後記

◇6月号をお届けします。日中の寒暖の変化が激しいですね。朝はコタツの電気をつけて、昼は暑くて半そでになる……。体調管理が大変です。

◇新緑の季節ですが、草の勢いも凄いですね。梅雨が始まる前に草刈りをする必要があるのですが、その余裕ができるのも本誌を無事発行した後。それまで梅雨入りしないことを願っています。

◇「季刊・グランデひろしま41夏号」にわたし赤川の「芸備線ぶらぶら散歩」の最終回が載っています。一年間計4回の掲載で、本誌連載の内容の要約ですが、紹介したいものも多くて悩みました。それも含めて、良い経験をさせていただきました。

発行：どら書房

〒727-0012

庄原市中本町 2-1-10

☎090(9913)3052(赤川)

e-mail:touzin@nifty.com

誌面デザイン：ROUTE183

協賛：九日市愛好会

第267回

くunchiichi

ひょうばあ九日市

出店一覧 (順不同)

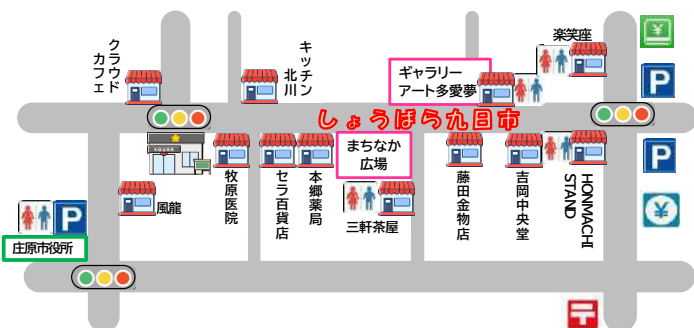
- ・文屋
- ・お福
- ・郷屋
- ・工房アム
- ・ぬくもり
- ・ちくちくはうす玉手箱
- ・和み屋
- ・クラフトショップ
- ・くららおばさん
- ・農楽会
- ・二八そば加工所
- ・17KITCHEN
- ・アーミッシュ
- ・ふくふく牧場
- ・満じいの手打ち蕎麦
- ・とらぢ
- ・健康企画グループ
- ・さだっさ
- ・里山キッチンほっぺ
- ・久代水産
- ・くんえん工房 香豚
- ・どんぐりーず
- ・田崎屋
- ・佐藤園芸
- ・TSUDA
- ・てしごと比和



2023年
6月9日(金)
9:00~13:00

TOPICS

- ★三軒茶屋・地域家族まなび場 野菜や食品販売
- ★市民ギャラリー「アート多愛夢」
6月9日(金) 10時~14時
お茶席
- ★楽笑座「うた声喫茶」休止
- ★どら書房→休憩所あります!!
- ★風龍→九日市スペシャルで餃子200円!
- ★HONMACHI STAND→コーヒー100円引き
- ★カフェクラウド→タピオカドリンク100円引き
九日市特製ピタサンド600円



* 出店申込みは、【毎月20日締切】 コンパネ1枚スペース1,200円~
九日市愛好会事務局 TEL/FAX(0824)72-8285
〒727-0013 庄原市西本町2-1-10 (楽笑座内)

【ホームページ】
<http://www.kunchi-ichi.jp>

